

# 経 済 情 勢

## 国 内

輸出が増勢を持続する一方、国内最終需要も総じて順調に増加しており、生産、出荷はともに高水準の伸びを続けている。この間、商品市況は引続き軟化した。最近では鉄鋼を中心に底値感も台頭しつつある。

設備投資関連指標は引続き高目の増加傾向を示している。個人消費関連では、百貨店売上げに低温の影響がみられたが、家電製品、乗用車等耐久消費財の売上げが好調を持続したほか、連休中のレジャー支出も持直しをみた。また住宅着工も、民間資金分の増加を中心に4か月連続で前年を上回った。一方公共工事請負額は、前月に引続き前年をかなり下回った。

6月の商品市況をみると、非鉄、食料品が海外市況の軟化から、鉄鋼、繊維が減産緩和や輸入玉増加から、ともに続落したため、4か月連続の低下となった。もともと7月入り後は、鉄鋼を中心に底値感が台頭しつつある。この間6月の卸売物価は、為替円安により輸出物価が上昇したが、鉄鋼、木製品等の国内物価が微落となったため、総合では前月比横ばいとなった。また消費者物価(東京)は、生鮮食品が大幅に続落したうえ、被服等も値下りしたためかなりの低下となった。

金融面をみると、5月のマネーサプライ前年比伸び率はほぼ前月並みとなった。また銀行貸出約定平均金利は前月に引続き小幅の低下となった。この間6月の公社債市況は、月初に急反発をみたが、下旬には円相場の下落等から再び軟化した。

5月の国際収支をみると、貿易収支が輸入の増加から若干黒字を縮小したことに加え、貿易外収支の赤字も拡大したことから、経常収支(貿易収支季節調整後)の黒字幅は、前月をかなり下回った。一方長期資本収支は、本邦資本が高水準の流出超を続けたうえ、外国資本も前月に引続き流出超を示したため、2か月連続で大幅な赤字となった。

6月の円相場(対米ドル直物相場)は、米国金利先高感の強まり等からかなりの

軟化となった。

#### 生産、出荷は引続き高い伸び

5月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比)\*、同出荷は、それぞれ+2.4%、+2.2%とともに高い伸びを示し、前年比では+12.5%、+10.0%の高水準に達した。

\* 以下増減率はとくに断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別生産、出荷動向をみると、前月減少の生産財(鋼帯、非鉄金属铸件、半導体、繊維原料)、非耐久消費財(医薬品、フィルム)が生産、出荷とも高い伸びを示したほか、建設財(建設・建築用金属製品、セメント製品)も久方振りの大幅増加となった。一方、一般資本財(化学機械、電子計算機)の生産は、前月大幅増加のあと一服となった。

この間、5月の生産者製品在庫は+1.1%と4ヵ月連続で増加したが、在庫率は3ヵ月振りに低下した。財別にみると、電気機械(VTR、オーディオ製品)、精密機械(時計、カメラ)の積増しの動きが一服したが、輸送機械(乗用車、トラック)が大幅に増加、また石油化学製品、鉄鋼、紙パ等では引続き若干の積上りがみられた。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、5月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は、前月著増の反動から-13.5%の減少となったが、前年比では+15.6%と9ヵ月連続で前年を上回った。また建設工事受注額(民間分、速報)は、前月減少のあと+22.8%と再び増加に転じた(前年比+13.2%)。

5月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は、民間資金分が貸家を中心に順調に増加したうえ、公的資金分も公団住宅着工増等から伸びを高めたため、合計では+16.8%の高い伸びとなった(前月+10.9%)。

個人消費関係では、5月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、低温による夏物衣料の売行き不調等から、+2.8%にとどまった(前月+6.1%)が、連休中のレジャー支出はかなりの伸びとなった模様である。6月の耐久消費財の売行きをみると、家電製品がVTR、電子レンジ、パソコン、エアコン等を中心に引続き好調に推移し、乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)も+12.7%と5ヵ月連続で前年を上回った。

一方、6月の公共工事請負額(前年比)は、-7.9%と前月に引続き減少した。

5月の雇用動向をみると、所定外労働時間が+0.3%と再び増加したが、常用雇用、有効求人倍率(0.64倍)とも前月比横ばいにとどまり、完全失業率は2.66%

と3ヵ月振りに上昇した。

#### 物価は引続き安定基調

6月の商品市況をみると、非鉄(銅、アルミ)、食料品(大豆)が海外市況の軟化から値を下げたほか、鉄鋼(棒鋼、厚板、薄板)が減産緩和から、繊維(綿糸)が輸入玉の増加から、ともに下落したため、全体としても4ヵ月連続で軟化した。もっとも月末から7月初にかけては、鉄鋼(条鋼類)を中心に底値感も台頭しつつある。

6月の卸売物価は、為替の円安化から輸出物価が上昇したが、輸入物価は木材の値下りもあって横ばいとどまり、また国内物価が鉄鋼、木製品の値下りを中心に微落となったため、総合では前月比横ばいとなった(前年比-0.4%)。

6月の消費者物価(東京、速報)は、生鮮食品が野菜の入荷増から大幅に続落したことや、被服が夏物衣料の値下りから反落したことを主因に-1.0%と目立って低下し、前年比は+2.4%となった(前月同+2.6%)。

#### 公社債市況は再び軟化

6月の金融市場をみると、銀行券は公務員ボーナス支給日が月末に変更されたことの影響等から20,195億円と前年(9,032億円)を大きく上回る発行超となったが、月中平均発行残高(前年比)は、+3.0%と前月(+3.4%)を下回った。一方財政資金は、一般財政が法人税の伸長から前年とは様変りの揚超となったが国債発行純増額が長期国債の休債等から前年を大幅に下回ったため、全体の揚超幅は9,972億円と前年(12,927億円)を下回った。この結果、その他勘定と合わせた月中資金不足額は30,014億円と前年(同22,075億円)を大きく上回り、日本銀行は前月売却した政府短期証券の償還や貸出、買入手形の実行等によりこれを調節した。

この間コールレート(無条件物)は、月央まで低下した後、月末にかけ銀行券増発等による資金不足地合を反映して上昇し、結局通月では前月末比横ばいとなった(月末水準6.0%)。一方手形レート(2ヵ月物中心レート)は小浮動で推移し、通月では-0.0625%の低下となった(月末水準6.1875%)。

5月のマネーサプライ(M<sub>2</sub>+CD平残、前年比)は+7.6%となった(前月+7.7%)。5月の銀行貸出約定平均金利(都銀、地銀、相銀平均)は、月中-0.012%と小幅の低下となった(月末水準6.714%)。

6月の公社債市況は、月初に米国債券市況の反騰等から急反発を示したあと小動きに推移したが、下旬には円相場の下落を背景に再び軟化した。この結果、新発国債応募者利回りが流通利回りをかなり下回る状況が続き、7月のシ団引受国

債は前月に引続き休債となった。一方株式市況は、月初に下げ止まった後、一進一退の展開となったが、月末にかけては機関投資家等の買いから若干値を戻し、東証株価指数は前月末比+20.37の795.67で越月した。

#### 円相場は続落

5月の国際収支をみると、貿易収支(季節調整後)は輸入が原油の入着集中もあって大幅に増加したことを主因に黒字幅を縮小し、また貿易外収支も国債利子等の支払から赤字幅を拡大した。この結果、経常収支(貿易収支季節調整済)の黒字幅は、24.8億ドルと前月(35.6億ドル)比かなりの縮小をみた。一方長期資本収支は、本邦資本が対外証券投資を中心に大幅な流出を続け、また外国資本も株式の処分等から2ヵ月連続で流出超となったため、37.2億ドルと引続き高水準の赤字を示した(前月同44.2億ドル)。

5月の輸出(通関、ドルベース)は+2.4%(前月+0.5%)と5ヵ月連続の増加となった(数量ベース+0.4%)。品目別(数量ベース)にみると、船舶、テレビ、合繊糸が大幅増となったが、鉄鋼、合繊織物、自動車は若干減少した。

5月の輸入(通関、ドルベース)は、原油、鉄鉱石、石炭、綿花等の原燃料輸入が前月一服の反動もあって著増したため、+10.3%と大幅に増加した(数量ベース9.7%)。

なお、6月の輸出入(通関、ドルベース)は、それぞれ+0.6%、-6.7%となった(数量ベースは+1.2%、-6.6%)。

円相場(対米ドル直物相場)は、月初幾分強含んだ後、月央以降は米国金利先高感の強まり等を反映して軟化し、通月では5円82銭の円安となった(月末水準237円45銭)。7月入り後も軟調な地合が続いている。

(昭和59年7月17日)